

学会賞受賞

日本植物病理学会賞：

對馬誠也 農業環境インベントリーセンター長

對馬誠也農業環境インベントリーセンター長は、平成23年度日本植物病理学会賞を受賞しました。この賞は、植物病理学上顕著な業績あるいは功績のあった日本植物病理学会員に贈られるもので、永年の「イネもみ枯細菌病の発生生態と防除」に関する研究業績が認められたものです。



センター長は、西南暖地で問題となっていたイネもみ枯細菌病について、水田での発病機構や感染経路を明らかにしました。また、穂やもみを使った発病検定法を開発し、発病条件を明らかにしました。さらに、発病を顕著に抑制する拮抗菌をイネから選抜し、生物防除の有効性を示しました。



発病した穂

これらの成果は、総合的病害虫管理 (IPM) や環境保全型農業を推進するための防除戦略のモデルケースとしても意義があり、フィリピン、韓国、米国など国外での生態・基礎研究にも広く引用され活用されています。

日本農薬学会奨励賞： 横山淳史 研究員

横山淳史研究員 (有機化学物質研究領域) は、平成23年度日本農薬学会奨励賞を受賞しました。この賞は、農薬の科学・技術の面で優れた研究をなし、なお将来の発展を期待し得る満40歳以下の日本農薬学会会員に授与し表彰するものです。



わが国の農薬登録制度における水産動植物への生態影響評価は、OECDテストガイドラインに準拠して、主に湖沼に生息する水生生物を対象としています。一方、わが国の農耕地の半分は水田であり、水田に直接つながっている河川では流水に適応した水生昆虫が重要です。そこで、河川の水生昆虫への農薬の影響を適切に評価できるよう、代表的な種であるコガタシマトビケラの室内飼育法と簡便な急性毒性試験法を開発しました。この

評価法を活用することで、わが国の河川環境に合った農薬の生態影響評価が可能となり、環境保全と安定的・持続可能な農業生産活動の両立に貢献できると考えられます。



日本農薬学会論文賞：

稲生圭哉主任研究員、 與語靖洋研究コーディネータら

稲生圭哉主任研究員 (農業環境インベントリーセンター)、與語靖洋研究コーディネータらの共著論文「光異性化および代謝分解を考慮した水田における農薬挙動予測モデル (PADDY) の開発：除草剤ピリミノバックメチルへの適用」(原文は英語) が、平成23年度日本農薬学会論文賞を受賞しました。



水田雑草であるノビエに優れた効果を示す水稲用除草剤ピリミノバックメチルは、有効成分である2種類の異性体 (E体とZ体) の混合物です。農薬製剤中には、E体とZ体がほぼ5対1の割合で含まれますが、水田に散布後は、太陽光による構造変化 (光異性化) が速やかに起こり、E体とZ体はほぼ1対1.35の割合で平衡に達します。また、土壌中の微生物により、E体とZ体のそれぞれから主に2種類の分解物が作られます。この研究では、光異性化および代謝分解を考慮できるようにPADDYモデル (水田一筆の中での農薬濃度を予測するモデル) を改良し、ピリミノバックメチルの挙動を精度よく予測しました。

(広報情報室長 廉沢 敏弘)